

災害の教訓は親から子供に話すことが大事

四国地方防災エキスパート 松尾 裕治

木元竹末（きもとたけうら）、木六竹八堀十郎（きろくたけはちへいじゅうろう）というその昔から伝わる慣用句がありますが、新聞にある年配の方が次のように書いています。「私が小学生ころ、父は裏山から炊事や風呂に燃やす木を切り出すと、庭で『木もと竹うら』と言いながらまき割をした。木を縦に割るときは根元の方から、竹は先の方から刃物を入れると容易に割ることができる。まず自分がやって見せ、その後で私にやらせた。合わせて『竹は八月、木は六月、堀は十月』とも言った。竹は八月、木は六月に切るのがよい。堀を塗るには空気が乾燥し、好天が続く十月がよい（何れも旧暦）。物事を首尾よく運ぶ要領、タイミングがあると教えた。『三つ子の魂百まで』。今も心にしっかり焼き付いている。」そのとおりだと思います。私も親から「稲むらの火」の話や南海地震の話を良く聞かされ、大地震が起こったらすぐ津波がくるので一刻も早く逃げるようにと教えられました。子供の頃に教えてもらったことは、今も忘れていません。

このように「親から子に話す防災教育」、「防災活動の基本ユニットは家庭である」という考え方が大事です。しかし災害に遭遇していない多くの方は、災害の話を日頃から子供に語る事が出来なくなってきています。そのため、私たちは災害の実像をイメージして子供たちに語る事ができる話を知る必要があります。

昨年の兵庫県佐用町水害、今年も山口県などで毎年のように洪水や浸水、土砂災害で多くの方が犠牲になっています。四国には、忘れてはならない犠牲者ゼロの「高知県西南部豪雨災害」の貴重な教訓があります。

～犠牲者ゼロ災害から学ぶ大きな教訓～

平成 13 年 9 月 6 日、住民が寝静まった午前 2 時頃から雨は激しさを増しました。時間雨量が 100 mm 近い猛烈な雨が 4～5 時間続き、土佐清水市などの 2 級河川が急激に増水し、1000 棟を超える住宅が壊れたり、軒下まで浸水するなどの被害が出ました。寝ている時間に住民を突然おそった集中豪雨で、文字通り「寝耳に水」でした。しかしこんな大きな被害を受けながら、奇跡的に 1 人の犠牲者も出なかった災害でした。

四国地方整備局・高知県が行ったアンケート調査によると、地域の住民の方は行政の避難勧告の前に危険を察知し、助け合いながら自主的避難を行っていました。地元の住民で構成される消防団からの呼びかけで避難をした人が最も多くなっていました。役所が避難勧告を出した時には半数以上の方が避難を終えていました。消防団の呼びかけや自主的な避難がポイントだったのです。また消防団員からは「首



また消防団員からは「首

まで水につかりながら1軒1軒の家を回った」とか「2階で助けを待っていたおばあちゃんを背負って避難した」というケースがいくつも報告されています。どこにどんな人が住んでいるかをよく知っていることが大事なことがわかります。人の命を救った秘訣は、地域コミュニティの健在であり、「人の命を救ったのは人のつながり」だったのです。このような過去の教訓を知って考え、災害から身を守る教訓とすることが重要です。

知って考えて家庭で話してほしい命を守る水害豆知識

19号で一部紹介しました住民の生の災害体験から得た身を守る10の教訓（住民の防災心得十箇条）を当時まとめた私の経験から解説し以下に紹介します。

【日頃の人の絆を大切に】

住民アンケートでは、この地域の住民は90%以上の人が常日頃から隣近所と密接な交流があると答えています。また避難した世帯のうち避難勧告の前に約半数が自主的に避難しています。深夜や早朝に突然に起こる起きる集中豪雨は、何故か役所などの体制が最も手薄な時に発生するケースが多く、このような緊急な事態では、**住民の皆さん自らの判断で避難するしかない場合が殆どです。**

この地域では、地元の人が声を掛け合い自分たちの力で災害を乗り切ったと言えます。

【昔からの言い伝え】

この地域では、90年前の大正9年にも大災害を受けています。「土佐清水市史」によると、大正9年8月15日の豪雨災害は言語に絶する惨状を呈したと記されています。しかしこの大被害のあったことは古老の方の一部にしか伝わっていませんでした。自分たちが住んでいる地域が昔ほどのような災害を受けてきたかなど昔の言い伝えなどに耳を傾け、自分達の地域の災害ポテンシャルを知ることが必要です。

【危険箇所を念頭に】

住民の方は体験談で、「上の瓦礫や木が流れてきて川をふさいだら、水が一番先にどこから来るかを僕らはよくわかっている。」「山に大きな石があり崩れたら危ない何箇所があること知っている」などと語っています。事前に危険箇所を確認して危険箇所を念頭においておくことが必要です。

【高い位置に避難場所を】

この地域では、中学校、小学校が避難場所に指定されました。しかし川沿いに造られた中学校の体育館が洪水で壊され、低い場所にあった小学校が浸水してしまいました。想

第1条: 日頃の人の絆を大切にすること。



第2条: 昔からの言い伝えに耳を傾けること。



第3条: 常に危険箇所を念頭に置いておくこと。



第4条: 高い位置に避難場所を考えておくこと。



定していた避難場所が避難場所の役割を果たすことができなかったということです。このため、土佐清水市立下川口小学校では、写真のように、平成13年水害の浸水位を学舎に表示して人々の防災意識を喚起するとともに、この教訓を踏まえて、校舎の屋上を避難場所として指定し、いざという時には校舎の中を通らずに避難できるように階段を設置しています。これは、水害対策のためだけの備えではなく、この地域が河口部に近く南海地震の津波を受ける可能性があるため、津波にも備えた対策でもあります。



【慌てて外に飛び出さない】

住民の方は体験談で「氾濫がすごかった、あわてて外に飛び出したらかえって危なかった」「おばあさんに『出るな、出るな』と言うた、出たら一発で流されていた」などと語っています。明け方の薄暗い中、飛び出していたらかえって危なかったと言えます。水害で避難のタイミングが遅れた場合、外に出るよりも浸からない家の2階で一時待機する方が安全です。昨年の兵庫県佐用町水害では、夜氾濫した激流の中を切羽詰まって避難した人の中に犠牲者が出ています。

第5条:水害時には慌てて外に飛び出さぬこと。



第6条:災害時には隣同士が連携して声を掛け合うこと。



【隣同士が声を掛け合う】

この災害の時、避難した人の30%の人が隣や近所の人に声をかけたと言っています。このような地域の助け合いが住民の避難に大きな役割を果たしたと言えます。

【一人で行動しない】

この災害では、独居老人や病人を、団員が背中におぶったり、手を引っぱったりして、避難場所に誘導しました。年寄りの方に、腰まで浸かって逃げろというのは無理です。万が一流された場合、一人では助かりませんし、助けを呼びに行くこともできません。

第7条:避難時には一人で行動せぬこと。



よくあるのが豪雨の中、水田の様子が心配で一人で見回りに行って、濁水の用水路や川に落ちて消息がわからなくなったりするケースです。危険ですので、浸水時に移動するときは、必ず2人以上で行動するようにしてください。

【棒で水中を探りながら歩く】

一旦、川が氾濫すると泥水で道路と側溝が識別できなくなり、側溝に落ちたり、蓋が外れたマンホールに落ち込むと命を失うこととなります。浸水時に避難する時は、絵のような「さぐり棒」を持って、その棒で前方を探りながら避難します。棒は流れてくる木や危険なものを押しよける役にも立ち

第8条:浸水時の移動に際しては棒で水中を探りながら歩くこと。



ます。棒はできるだけ片手で容易にあやつれる四国札所巡りの杖程度のものが望ましいですが、無ければ物干し竿でも棒なら何でも良いのです。

【電気電話は使えない】

防災無線、電気、電話が使えぬ状態を想定しておくことです。災害時には、テレビや電話など普段使えるものが使えなくなります。このため災害時に使える情報伝達手段の確保や人伝えの情報伝達を重視することが必要です。

行政の体制が整っておらず情報連絡が出来なかった今回のような切羽詰まった災害においては、多くの住民が人伝えに情報を伝え、助けあい、避難し、犠牲者を出さなかったのです。そのことを示す住民のアンケートの興味深い結果が右のグラフです。

住民の方は「人伝え」の情報伝達を最も頼りにしています。その理由は、テレビ、ラジオ等では情報の送り手と受け手が別の場所にいる片方向の情報伝達に対して、「人伝え」は「双方向」の情報のやりとりであり、送り手と受け手が同じ状況にいる身近な人である場合が多いため信頼感が増すからであると考えられます。

最近の災害では、避難勧告が出ても住民の多くの方は避難しないという結果が出ています。自分が避難しないことを隣が避難してないからと自分の行動を正当化する「正常化の偏見」という心理が働くと言われます。この住民の心理を打ち砕く方法として、テレビで伝達するだけではわからない、現場の人伝えの情報の大切さが改めてわかります。例えば身近な人から「水がそこまで来ている、避難しないといけない」と言われると避難すると思います。今後、地域では、このような住民の目線を見た、人を中心とした災害現場における情報伝達のあり方も検討していく事が重要であると思います。

【力を合わせて助け合う】

やっぱり、最後は災害時には、みんなが力を合わせて助け合うことです。

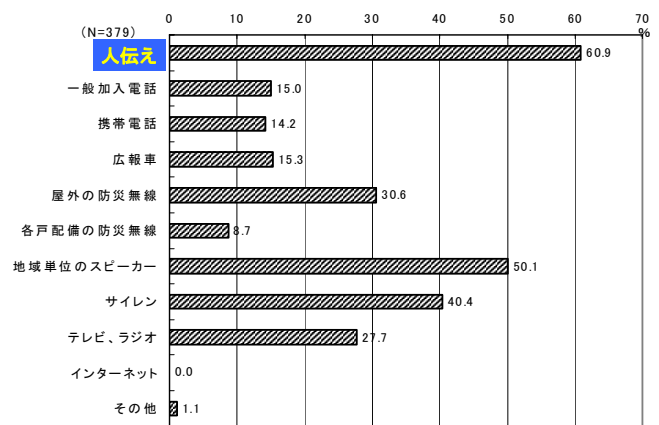
～ぜひ参考にしてほしい～

以上が、水害体験者が語った災害時の住民行動をお手本に作成した教訓です。皆さんが住む地域でどのような災害の危険があるかによって、少し違うところがあるかもしれませんが、自分の判断で行動する際、**身を守る防災を首尾よく運ぶ参考**に！ぜひ家族で語っていただきたいと思います。

第9条:防災無線、電気、電話が使えぬ状態を想定すること。



問 災害時にどのような手段で情報を入手したいか



住民は「人伝え」を最も重視している

第10条:みんなが力を合わせて助け合うこと。



わがまち太田南の『防災まちづくり活動』紹介（高松市太田南地区）

平成 21 年度は、住民の立場に立った事業として、現地・現場の実態を踏まえた『防災まちづくり事業』の実践を行ってまいりました。主要な活動内容についてご紹介します。

1. 地区別防災マップの作成・配付

地区全域マップでは実現できなかった、自治会内の災害発生時に役立つ施設ならびに道路幅表示の実現、自治会内および近隣自治会との相互支援を円滑に行うための自治会エリアの明確化を目的に地区別防災マップを作成しました。



写真 1 現地調査でブロック診断を体験



写真 2 自治会代表者によるマップ原図作成

2. 地区震災対策訓練の開催

地区住民を挙げての訓練定着を目指し、災害時要援護者の誘導・救護を含む実践的な震災訓練を平成 21 年 9 月 27 日に住民 7 6 5 名が参加し、行いました。



写真 3 災害時要援護者の搬送訓練



写真 4 バケツによる消火訓練

3. 普通救命講習会の開催

平成 21 年 11 月 29 日に住民 3 5 名が受講し、修了証を取得しました。



かがわ自主ぼう夏季研修会の開催について

平素は、何かと地域活動おつかれさまです。このたび平成22年度の研修会を次により開催しますので、多くのご参加をいただきますようお願い申し上げます。また併せて、研修会終了後、交流会を開催しますので、ご案内申し上げます。

1. 日時 平成22年8月21日(土) 17:00～19:00
2. 場所 高松市サンポート2-1 e-とぴあ・かがわ BBスクエア
3. 研修 (1)「土砂災害」に弱い讃岐人
香川大学工学部 教授 長谷川 修一氏
(2)「家族を守る斜面の知識」
(有)ジオリサーチ 代表取締役 太田 英将氏
(3)自主ぼう活動報告
4. 交流会 ビアテラスサンポート(高松シンボルタワー 3F)
19:00～21:00 会費 2,000円
5. 参加申込 (交流会参加者は、○印を記入下さい)

8月18日(水)〆切 < Fax : 087-822-0112 >

所 属			
氏 名	交流会	氏 名	交流会